事例No.	1254
公表年度	R2
団体の属性	一般市
団体名	新潟県十日町市

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・地域運営組織 ・観光

事例種類	関係人口

事例内容・タイトル

「里山にいきるプロジェクト2020」～「大地の芸術祭」の里・越後妻有～事業

出典

令和２年度「関係人口創出・拡大事業」モデル事業調査報告書

(10) 新潟県十日町市

事業名：「里山にいきるプロジェクト 2020」
～「大地の芸術祭」の里・越後妻有～事業

概要

大地の芸術祭を支える集落の問題を解決していくため、関係人口が参加する現地でのスタディツアー・ワークショップを実施。集落とも連携しながら地域の課題解決のためのアクションプランの策定を行った。

主な成果

市内の課題への理解や課題への関与意欲についてアンケートを実施。いずれも目標値を達成。今回各ツアーでの参加者が、他のツアーに参加をしたり、別の関わり方を持ち始める動きが見られている。３回目のツアーは急遽オンラインで実施となったものの、オンラインだからこその良さに気づいた。

①事業の背景・目標

1) 関係人口によって解決・改善を図りたい地域課題

・2000 年から３年に１度行われている「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」は、会期中(約 50 日間)55 万人を誘客するが、約２年半にわたる会期外の期間中においては集落の高齢化、展示作品の維持管理コストなど複雑かつ多様な課題を抱えており、地域内の事業者・住民の力だけでは解決が困難な状況が続いている。

・地域資源である大地の芸術祭作品を活用し、多くの人が行き交う地域作りが課題であり目標。

2) 概ね５年後の地域の理想の姿

・次回、芸術祭を開催する 2021 年夏以降も関係人口と地域の交流が継続されており、作品周辺地域住民のみならずより広域にわたる地域住民と、新たに関係が創出された多様な地域外の人々により、地域の資産である作品施設を通して互いに地域の未来の姿を描き続けることができている状態。

3) これまでに取り組んできた関係人口関連施策の実施状況・成果

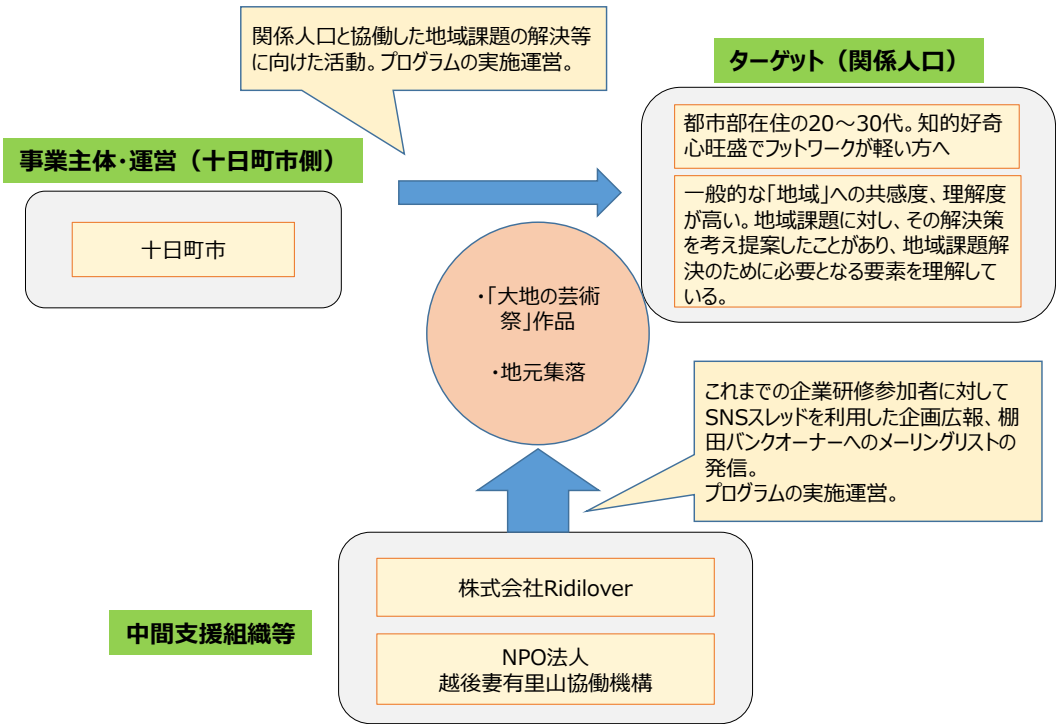
・当地域で行われている大地の芸術祭において、プロジェクトの運営を行う首都圏を中心としたボランティアサポーターが組織されている。年間を通して作品の管理と合わせて地域の行事に参加するなど、地域住民との交流を行っている。また棚田の保全活動を行う棚田バンクという取組内において、棚田のオーナーとなった方々と田んぼの作業(田植え、草刈り、稲刈り）をとおして地域住民との交流を継続している。

4) 今年度事業の目標

目標	大地の芸術祭の作品を中核とした集落の地域コミュニティの維持・存続。外部人材がプロジェクトとして継続的に関わり集落の活動人口を増大させていくことで、集落の地域コミュニティを維持することを目指す。
成果指標	・ツアーによって市内の課題への理解が深まった：平均４．０以上(５段階中) ・ツアーによって課題への関与意欲が固まった：平均４．０以上(５段階中)
目標値 （基準値）	アンケートの回答において 市内参加者の人数目標：10 名（基準値：０名（2019 年度）） 一般参加者の人数目標：15 名（基準値：０名（2019 年度））

②事業実施体制

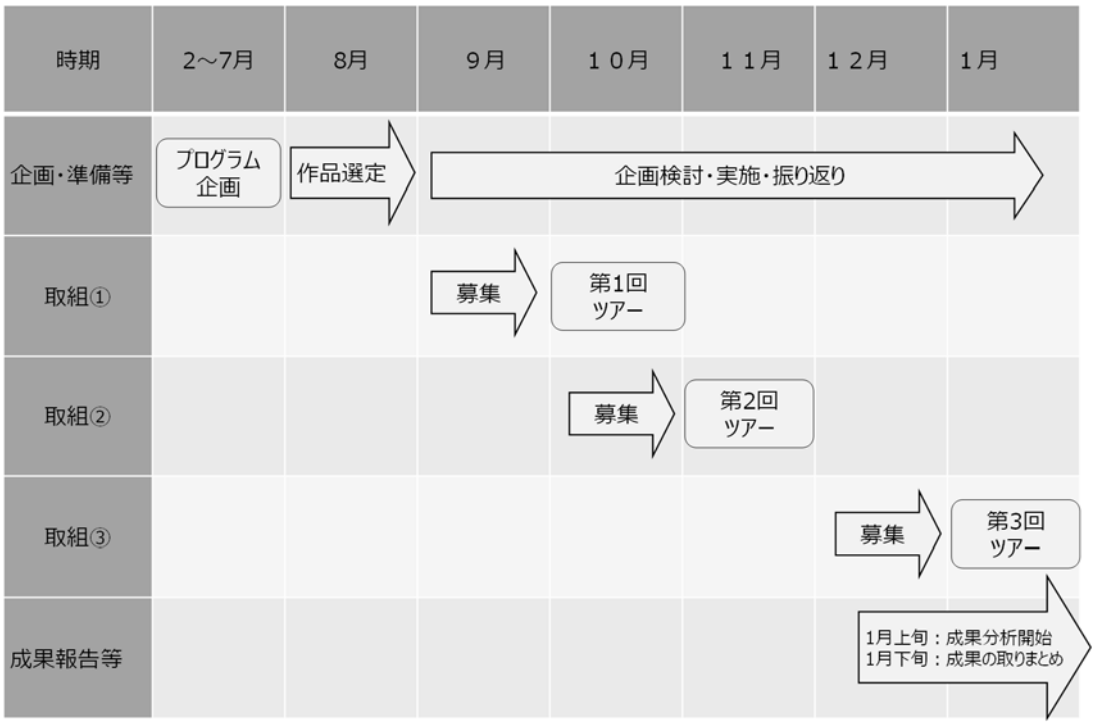
区分	団体・組織名称	役割
行政	十日町市観光交流課	地域住民への声掛け、連絡調整等。事業開催に伴う地域課題の抽出、事業参加者の選定。すでに担っている中間支援機能について、継続的なプロジェクト企画に向けた機能の高度化を狙う。
中間支援①	NPO 法人越後妻有里山協働機構	参加者の現地滞在の調整、地域住民と参加者との意見交換やヒアリングの場のコーディネート、最終提案に対する業務遂行。
中間支援②	株式会社 Ridilover	参加者の募集、業務提案に向けたツアー企画運営。参加者、地域住民へのプロジェクト企画のための定期的なフォロー。
地元受入主体	作品集落の地域住	参加者と意見交換を通して、地域の目指す姿を描く。十日町市、NPO 法人越後妻有里山協働機構と協力し、地域の資産である施設の活性化に向けた取組を遂行する。



③ターゲット設定とアプローチ方法

ターゲット層	アプローチ（情報発信）方法	期待する役割・関わり方
都市部在住 20-30 代男女。知的好奇心旺盛でフットワークが軽い、収入は安定しており、地域往訪にかかるコストを気にしない。他地域への往訪、関係人口化の経験があり、一般的な「地域」への共感度、理解度が高い。地域課題に対し、その解決策を考え提案したことがあり、地域課題解決のために必要となる要素を理解している。	これまでリディラバが大地の芸術祭を舞台に行ってきた企業研修の「未来の教室」「Field Academy」参加者とのSNS 連絡スレッドによる企画広報、オフィシャルサポーター研修参画企業に対する告知、棚田オーナーのメーリングリストへの発信。	「大地の芸術祭」にて生み出された作品群を題材として、これまで培ってきた「アート×地域」という方向性での関係人口創出に加えて、より一層課題解決に踏み込んだ形での関係人口を増やしていく。地域課題解決に取り組むプロジェクトが多数地域内にて動いており、関係人口の力を借りながら、持続可能な形での芸術祭運営ならびに地域コミュニティの維持が行われている状態を目指している。

④事業スケジュール



⑤取組の内容

【取組1「大地の芸術祭」の里　里山にいきるプロジェクト 2020（1の旅）】

目的と概要

・関係人口拡大のため、地方移住を考えている教育関係者や子どものいる家族を対象に、ツアーを実施。芸術祭作品の制作ヒストリーや地域との関わりを学び、芸術祭作品の利活用を考える。

開催日時・場所

・10 月 31 日～11 月 1 日、十日町市

プログラム

・大地の芸術祭作品鑑賞、廃校案内（絵本と木の実の美術館、三省ハウス、地域の取組(まつのやま学園)、芸術祭ディレクター北川フラム講演、ワークショップ

参加者

・15 人（+市内参加５人）※リディラバからの Peatix 発信、大地の芸術祭 HP から募集

成果等

・事業参加者アンケートによると、一般参加者・市内参加者ともに「ツアーを通して地域が抱える課題への理解が深まった」への回答の平均値が目標値である４ポイントを達成した。




地域資源を生かした芸術作品の鑑賞


大地の芸術祭ディレクター北川フラム講演


地域住民とのワークショップにより、地域の未来について議論


廃校活用作品と地域の関わりについて講義

【取組2「大地の芸術祭」の里　里山にいきるプロジェクト 2020（2の旅）】

目的と概要

・関係人口拡大のため、地方移住を考えている方や農業に興味を持っている方を対象に、ツアーを開催。芸術祭をキッカケに移住してきた若者から、この地域で暮らしていくこと、働くことの意義を学ぶ。

開催日時・場所

・11 月 21 日～11 月 22 日、十日町市

プログラム

・作品鑑賞、集落散策、芸術祭をキッカケに移住してきた若者による講演

参加者

・15 人（市内参加６人）　※リディラバからの Peatix 発信、大地の芸術祭 HP から募集

成果等

・事業参加者アンケートによると、一般参加者の「ツアーを通じて地域が抱える課題への理解が深まった」への回答の平均値が 4.73 ポイントと高い数値だったのに対し、市内参加者の回答の平均値は 3.0 ポイントと低い数値となった。





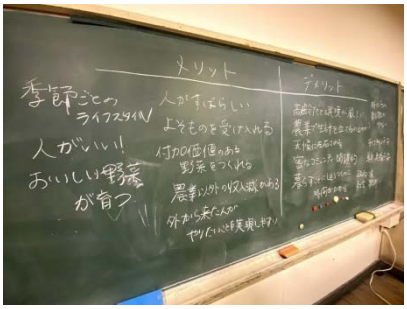
移住者による地域での仕事のお話



地元養鶏農家による鶏をさばく体験



芸術祭作品の運営を行う移住者によるお話



ワークショップの様子

【取組3「大地の芸術祭」の里　里山にいきるプロジェクト 2020（3の旅）】

目的と概要

・関係人口拡大のため、「大地の芸術祭」に興味を持っている方を対象に、オンラインツアーを実施。芸術祭に関わる裏方スタッフの作業風景を通し、観光としてだけでなく、より深い関わり方を提案する。

開催日時・場所

・１月 23 日、十日町市よりオンラインで中継

プログラム

・冬の様子の現地中継（除雪、冬の美術館企画展、雪見御膳の取組紹介など)、ワークショップ

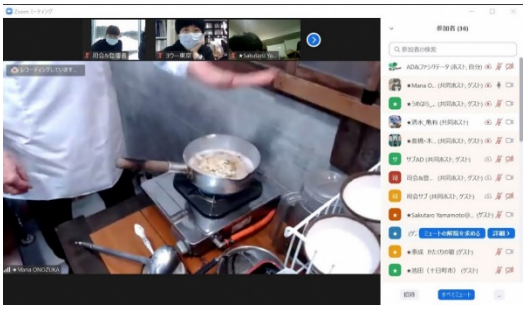
参加者

・21 人　※リディラバからの Peatix 発信、大地の芸術祭 HP から募集

成果等

・事業参加者アンケートによると、これからも「大地の芸術祭」・越後妻有を訪れたいとの回答の平均値が５ポイントで期待以上の成果が出た。





参加者と一緒に雪見御膳体験



集落のお母さんとの交流



除雪や冬の暮らし紹介



参加者からの決意表明

⑥事業成果

1) 取組ごとの成果発現プロセス



2) 本事業全体を通じた成果

・本事業では、異なる３つのテーマでスタディツアーを実施した。
・スタディツアーを通じ、地域課題を知り解決のため今後も関わってくれる地域外の人々が出てきた。
・また、地域外の人との触れ合いや考え方に触発され、地域住民の意識にも変化がみられた。
・今回各ツアーでの参加者が、他のツアーに参加をしたり、別の関わり方を持ち始める動きが見られている。
・夏に控えている大地の芸術祭第８回展に向けて、今回のツアーでの実績を基に地域とのつながりをより強固にし、課題解決に向けた取組に弾みをつけたい。

⑦事業を通じた課題・気づき等

1) 事業の目標設定と達成に関する課題・気づき

・地域外からのツアー参加者へのアンケートでは、今後も地域と関わり続けたい意向の方が大半だった。一方で、関係人口の拡大に向けては、地域からの関わり方の提案と、継続的なコミュニケーション、より具体的な目標設定が必要という気づきが得られた。

2) 事業の実施体制に関する課題・気づき

・多数の関係者と密度の高い検討・打ち合わせを行い、来年度の大地の芸術祭８回展に向けて、地域との関係を考える機会となった。

・日頃から現地でスタディツアーを行ってきたリディラバと、より一歩集落へ踏み込んだツアーの実施を目指し検討を重ねた。役割分担を行い、スピーディーに企画・募集・実行と進めることができた。

3) ターゲット設定や募集・情報発信等に関する課題・気づき

・ツアー参加者募集については、社会課題をテーマに勉強会やスタディツアーに取り組むリディラバの顧客に向けた発信により、地域課題へ関心の高い参加者を集めることができ、質の高いツアーを実施することができた。

4) 各取組の実施・運営に関する課題・気づき

・コロナ禍における、地域の危機感や、それでも受入をしてくれた集落への感謝の気持ちが参加者の心に訴えかける大きな要因となった。

・３回目のツアーはオンラインだからこその良さ（現地に来られない状況や、個々の状況によりツアー参加が難しい方など、現地ツアーとは異なる層での参加が見られた）があった。

⑧今後の関係人口創出・拡大に向けた展望

1) 本事業の成果の今後の活用・発展方向について

・大地の芸術祭に賛同し、ふるさと納税や芸術祭サポーター、棚田の里親として、継続的な十日町市の支援者（＝関係人口）は、増えつつある。今後は、大地の芸術祭を通じて、地域外の方を地域づくりに巻き込み、引き続き地域コミュニティの維持・存続と発展を目指す。

2) 地域における関係人口への期待について

・地域課題解決に取り組む他のプロジェクトと連携しつつ、関係人口の力を借りて、持続可能な形での芸術祭運営ならびに地域コミュニティの維持が行われている状態を目指す。

3) 今後の関係人口創出・拡大に向けた政策等について

・棚田オーナー制度、こへび隊（大地の芸術祭をサポートする方々）等で関わっている関係人口に対して、より具体的な地域課題を提示し、協働して課題解決に取り組むことで、これまで積み上げてきた関係人口をさらに昇華させ、課題解決型の関係人口を構築する。

4) 地域における持続的な受入の体制・仕組みについて

・関係人口の受け皿となる中間支援組織としては、これまでの取組においても中心的な役割を果たしているNPO法人越後妻有里山協働機構を想定しており、アートや地域を魅力として集まる人材から地域課題解決に取り組む人材まで多様な関係人口の受け皿として機能させる。